

学会場見聞記

～ 第 31 回日本プライマリ・ケア学会 2008 岡山 ～

岡山大学名誉教授 青山 英康

地球レベルの天候不順の中での遅ればせながらの「梅雨入り」で、会期中は雨天続きの予報であったが、「晴れの国、岡山」の名に恥じない晴天が会期の全日程中続く幸運に恵まれた。これまで数多くの全国学会を準備した経験を持つ者の一人として、いつも「岡山での学会は盛会」という評価を戴いてきた。これは岡山が観光旅行先に選ばれるほど魅力的な観光地に乏しく観光目的で岡山を旅行先に選ぶことが少なく、学会でも開催されない限り岡山を旅することがないためと云われている。そのうえ、岡山での学会に参加すると学会場を抜け出して観光に出掛けるところは名園の一つである「後樂園」と倉敷の美観地区と大原美術館となれば、抜け出しても精々一・二時間で再び会場に戻って来るため参加者が会場に溢れる盛況をもたらすことになる。今回も例外ではなく登録者数が約 2,500 人にも達し、井戸俊夫会頭はじめ青木佳之、福岡英明、宮原伸二、笠井英夫など開催事務局を担当していた多数の県医師会員は準備していた抄録集の数が足りなくなるのではないかと嬉しい悲鳴をあげていた。二日間の会期中いずれの会場も満席であり、保健・医療機器や図書販売の企業展示場をはじめ意見公開のブースは勿論、230 余題の登録があったポスター展示場は「歩行者天国の銀座」にも例えられる活況を呈した時間帯もあった。

今回の学会場となったコンベンション・ホールとデジタルミュージアムは参加者の多くが利用した駅に隣接するホテルに連結して居り、全ての学会関連施設が駅を中心に隣接して集中していた点が参加者にとっては大きなメリットになっていと思われる。

尚、依頼された字数の関係で本文中では尊称を全て省略したことを記し、お詫び申し上げます。

岡山でのプライマリ・ケア学会活動

岡山での日本プライマリ・ケア学会の開催は二度目であり、24 年前の前回は川崎医科大学の学長を会頭に我が国で最初に発足した総合診療科の主任教授であった平野 寛現名誉教授を中心に大学を挙げての開催であったのに対して、今回は県医師会が中心になって歯科医師会や薬剤師会、看護協会、栄養士会など地域の保健・医療・福祉の幅広い各分野の専門職の職能団体が協力して取り組まれた点で大きく性格を異にしている。

岡山では県医師会長を長年にわたって務めた永瀬正己が「実地医家のための会」と創立時から接点を持って居られ、全国学会の開催以後も県医師会がリーダーシップを持って県下の専門職種の職能団体との連携を図って年に一回の支部総会と研究報告会を開催し、地域保健・医療・福祉の各分野のプライマリ・ケアに関わる情報と経験の交流と問題点や概念に対する共通の認識と理解を確認し合っ来て、岡山市医師会は隔月にプライマリ・ケア研究会を継続して行っている。このような地道な活動の継続が、学会開催以後の会員の退会を予防し、プライマリ・ケアという共通基盤をもつ各種の専門職が日常業務の中の調査・研究=Practice based research を実践し、今日で云う科学的な保健・医療・福祉=Evidence based medicine/health care の展開のエネルギー源となっている。

このようなプライマリ・ケアをめぐる独特な風土を持つ岡山での学術集会として「いのち 健康支援から看取りまで」をメイン・テーマに選んだことは極めて意義深い。

評議員会・総会の討議と市民公開講座

学術大会の開催前日には、「市民公開講座」と役員会・支部連絡会議などが開催された。演題名が市民向けでなかったのか参加者数は意外に少なく 300 名程度であった。

「市民公開講座」の講師は検察庁で敏腕を振るった後に福祉の世界に身を移して活躍するという異様な経歴を持つ掘田 力（さわやか福祉財団理事長）が「最期まで尊厳をもって生きるために」と題して、とくに福祉の現場から認知症患者を含めての「尊厳死」に対する医療人に向けての講演の感じがした。

演者の常日頃の主張はマスコミでも大きく取り上げられることが多く、開催準備に当たった側からは講演を公開する市民のニーズに基づいての企画であったが、話の内容が保健・医療・福祉に関する日常的な関心事への回答というよりは介護を受ける側の人権尊重の立場からの医療・看護・介護に当たる側への注文であったために市民からは「難解」との批判も聞かれた。この点、学会の「市民公開講座」としては、学会の主張や苦労話を市民に訴える「場」としての意義付けも大切ではないかと考えられた。その意味で「教育講演」や「ランチョンセミナー」の中で、本学会を代表して「市民公開講座」での講演をお願いした方が効果的だったのではないと思われる講師が多数居られた。

評議員会では、議題の最後に予定されていた「三学会の合併」問題に討議が集中した。翌日の総会でも同様な活発な討議が予想されたが全くなく、本学会の評議員が会員の総意をよく代表していることを示したとも考えられる。